

# シンクロニシティ

## インタビュー



### PROFILE

ささ はらてつ や 佐々原鉄宅 (写真左、通称チャチャ) ・ すえ よし ま さ か ず 末吉正和 (同右、通称ラガー) の二人組。

1999年、佐々原さんは京大理学部、末吉さんは農学部に入學し、京都大道芸倶楽部 Juggling Donuts に入会。昨年3月に無事卒業し、プロとしての活動を始める。

コンビ名“シンクロニシティ”は、「意味のある偶然の一致」という意。「二人が同じ時期に京大入って同じサークルでコンビ組んだのが面白い、と思ってつけた名前だけど、お客さんも、たまたま通りかかったときに『こいつら面白いかも』と思った人だけが立ち止まる、その空間もシンクロニシティなんじゃないかと感じてるんです」(末吉)

### 京大入学、ジャグリングとの出会い

佐々原 (以下チ): 大学入ってすぐの頃は、「勉強しよう!」って思ってたね。

末吉 (以下ラ): お前最初の頃めっちゃ勉強してたよなあ? 俺は「遊ぼう!」って思ってたけど。麻雀にハマり、深夜まで... というごく一般的な京大生。

でも二人とも将来のことはなんにも考えてなかった。まあ普通に院まで行くかー、院出たら就職して結婚しようかー、ってくらい。

チ: サークル (Juggling Donuts) との出会いは、入学式のあたりに沢山配られるじら。そのころはサークルがまだ小さくて、配られた枚数もすごく少なくて。もらったのが奇跡かもしれない。惹かれたのは、何か積み重ねて、人にできないことができるようになる! ってところ。で、これ面白そうかな、と。

ラ: 俺はとにかく目立ちたくて、これやったら目立つっちゃうん、合コン行けるんちゃうん、と。

チ: 最初は二人ともほかのサークルも並行してやってたけど、ジャグリングのほうによりハマっていった。

### コンビを組み、プロの道を目指す

チ: 一回生のNFの時、先輩から「一人一人でやるのは不安だからお前二人でやれ」と言われて。その時は二人でやるネタとか何もなく、ただ交互に出てきてつないだけだったけど。それで二回生の時にはちゃんと二人でやろうと、二人でやる技なんかも考えた。ちゃんとコンビを組んだのはそれが最初かな。

ラ: サークルの定期的な活動に、NFのほかに4月のステージがあるんです。それで次も二人で出ようってのがあったから、それからはずっと二人で。それ以外にもサークルでいろいろと仕事を月一回くらいやってたね。一人よりも二人のほうが楽しいし。

チ: 俺はもうそんな風に活動してたから、これで行こうっていう気持ちがあいつの間にか自分の中に出てきて。決定的だったのは、その三回生の時の4月のステージがすごくうまく行って。それが影響したかな。

ラ: あれはすごかった。抜け出せない世界を見てしまったからね。あれぐらいの興奮はほんと二度とないよね、まだ。ちゃんとしたステージに立ったのは初

めてで、結構広いホールで200人くらいのお客さんがすごく盛り上がって。全員の視線が俺たちに集まって、しーんとしたり爆笑が起こったり。

チ: ほんの数分間くらいだったんだけど、その時に自分たちが受けた感動がすごく。

ラ: そしてこいつは授業に出なくなった(笑)。

チ: その頃はもうずっと吉田食堂の横で練習してた。二回生まではかなり単位とってたけど、三回生では20もとってない。卒業する時も、増加単位があることをすっかり忘れてて、成績表をもらった後に8単位足りないことに気づいた(笑)。それから研究室回って頭下げて、一週間でレポート書いて単位そろえて。あの時は人のやさしさを感じました。

### 周りの人々と違う世界へ

チ: 不安は全然なかったね。

ラ: むしろ逆かな。これは面白い、と。

チ: たとえば会社とか勤めてたら、自分の手の届かないところで何か起こったりして、それで切られちゃったらどうしようもなくなるわけよ。でも俺たちは、もしどうしようもない状況になっ

ても、どこか行って芸やって、100円でも200円でもくれる人がいたらそれで何とか生きていけるわけだし。まあ別に大丈夫じゃないかと。

ラ: 俺はその時にはまだそのレベルじゃないなと思ってたけど、こいつが「大丈夫だよー」とか言うし、先輩も「いいんじゃない?」って。

仲の良い大学の先輩で、大学を休学して陶芸修行してた人がいたんです。でもその人は2年ぐらいて結局戻って来てしまった。「やっぱり逃げ道を残しとくとよくない」って強く説いてくれたんです。俺は院に行っって休学しつつやっていけたらいいなと思ってたけど、それはしなくてよかった。

チ: さすがに親に話した時はショックだったみたいだけど。

ラ: うちだと、親父は自分が大学行けなかったから俺に大学行ってほしかったのがあって。せっかくな京大行ったのにこいつは何を考えるとんだボケェ、と。もう緊急家族会議まで開いて、親父は泣き出す始末。どないしようかなー、てのはまあ、あったけどね。その年にちょうど姉ちゃんが結婚して、いい機会やし、結婚式で二人で余興をすることになって。それを家族も見ると、そこで親父が半泣きでこいつに「正和をよろしく」と。

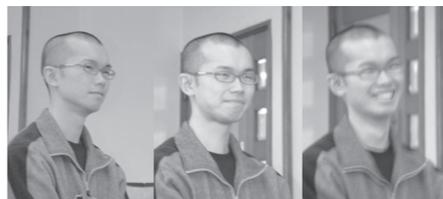
チ: 「はい、お父さん!」って。何の花嫁だよ(笑)。

ラ: まあ、そこで認めてくれたかな。

### 最近の生活

チ: パイトを学生のときからやってたけど、先輩の芸人さんから「パイトはやめたほうがいいよ」って言われて。

ラ: やっぱりそれは追い込まなきゃいけないってことで、収入源が他にもあったら、「仕事なくても何とか食ってい



はみだしすてーじ そんなに強くないです。



けるか」っていう甘えが絶対出るから。チ: それじゃ成長しない。

ラ: それでやめたって言った「やめちゃったの? あーあやっちゃったねえ」って(笑)。でもやめてよかった。全然変わった。環境とか感覚とか。やっぱりバイトしてるときよりもやめた後のほうが、見る人たちからすると魅力的なはず。俺たちもこれだけで食ってんだという自負があるし。チ: で、あとは回数重ねていく。やっぱり俺たちひとつひとつ分析するのが好きだから。二人で「これ良くなかったなー」とか、「次はこうしよう」とか。

ラ: もちろん京大生じゃなくても分析できる人はたくさんいるけど、京大という分析する人ばかりの環境にいたのはひとつでかいと思う。

### 大道芸人として、これからの目標

チ: 俺たちショーの中でお客さんに「オー」とか「イエーイ」とか言ってもらうけど、それってかなり大変なことだよ。いきなり『イエーイ』って言ってください」って言っても言ってくれるわけないし。それが最近結構うまくいってるのは、いろいろ努力して改良してきたからだと思う。単にジャグリングの技術だけじゃなくて、お客さんも巻き込むところが大道芸の面白いところ。

ラ: そもそも大道芸とジャグリングとは違うもので、大道芸には他にもパントマイムとかマジックとかいろいろあるわけ。だから俺たちは、プロのジャグラーというよりはジャグリングをメインにしてる大道芸人といったほうがび

たりくる。チ: 大道芸人にもいろいろなスタイルがあるけど、俺たちぐらいジャグリングする人はほとんどいないね。

ラ: そこはやっぱり売りにはしてる。大



道芸人って、メディアとか出ないから気づかないと思うんだけど、みんなが思ってるよりももっとたくさんいて、今すごい増えてる。その中で、芸のレベルまでジャグリングを持っていった上でショーとして見せられる人は今あんまりいないと思うんで、もっと上を目指していこうかなあと。

チ: まあ大金持ちにはなれないだろうけど、ジャグラーといえばシンクロニシティなんじゃない? ってくらいになればね。

ラ: いわゆる大道芸人にも2パターンあって、ほんとに大道芸をして、最後に皆さんからのお気持ちを頂いてそれで生活してる人と、イベントに出て、ギャラをもらって生計を立ててる人と。俺たちにとって面白いのは、前者の、土臭いっていうかそういうことをやってる人たち。だから俺たちももっとそんな風にやっていけたら。不況で仕事なくても、ギャラ無しでいいから芸をなしに行って、そこでみんなのお気持ちをもらったら、それはほんと自分たちのがんばった分が返ってくるわけだから。それで生活できるようになればもっと面白いかな。

— ありがとうございます。(とうめいRunner)

シンクロニシティのHPアドレス:

<http://www.geocities.jp/jugglersynchro/>

彼らのプロフィール、イベントへの出演予定などが掲載されています。